東京国際芸術祭 Tokyo International Arts Festival

Port B　ポルト・ビー

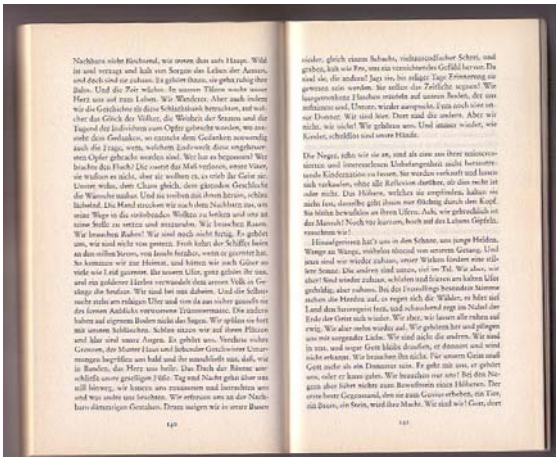
作：エルフリーデ・イェリネク／翻訳：林立騎

構成・演出：高山明

『雲。家。』

Wolken. Heim.

＜日本語上演＞



主催：ANJ NPO法人 アートネットワーク・ジャパン Arts Network Japan　/　Port B

特別協賛：アサヒビール（株）

協賛：（株）資生堂／トヨタ自動車（株）／松下電器産業（株）

助成：（財）アサヒビール芸術文化財団

協力：東京ドイツ文化センター

2007 年 3 月 1 日（木）－4 日（日）

にしすがも創造舎

お 問 合 せ

東京国際芸術祭（TIF）

TEL.03-5961-5202/FAX.03-5961-5207/tif@anj.or.jp

ノーベル賞作家、エルフリーデ・イェリネクによる僅か40ページの戯曲 『雲。家。』。
極右思想を思わせるそのテキストは、哲学者や詩人の引用をコラージュしたもの・・・
言葉とテーマが深く結びつくあまり、外国での上演は不可能と言われている本戯曲に、
越境的思考で多メディア・多ジャンル的な活動をする Port B が挑む―

『雲。家。』 作:エルフリーデ・イェリネク／独題:Wolken. Heim.／執筆:1988年	作品紹介

2001年のカンヌ映画祭グランプリ受賞作『ピアニスト』の原作者として、そして何よりも2004年のノーベル文学賞受賞者として知られる作家、エルフリーデ・イェリネク。彼女が1988年に発表した僅か40ページばかりの作品『雲。家。』は、通常の意味での「戯曲」からはかけ離れている。登場人物の指定や舞台設定への言及、また作中のト書きといった、いわゆる「戯曲」の特徴たる一切をこのテキストはもたない。ただ「わたしたち」という主語をもつ言葉が、24に区切られた断片をひとつまたひとつと紡ぎ出すだけである。

そこには「対話」もなければ「物語」もない。一貫した筋のようなものさえない。だが問題はその「わたしたち」の独言が扱う内容にある。それは人種差別、外国人排斥、自民族の優性の強調、隣国に対する侮蔑、郷土愛、愛国心、そして祖国のための死といった、かつてのファシズムか、あるいは今日の極右のアジビラを思わせるようなものを含んでいるのである。そして、例えばこれがたんに1988年の状況に対してイェリネクが突きつけた言葉であったなら、彼女による現代批判として片付けることも可能になるのだが、そのような身振りを許さない根深さをこの作品は秘めている。

ヘルダーリン、フィヒテ、ヘーゲル、ハイデッガー・・・
祖国への想いが綴られたテキストの断片が、極右思想を連想させるテキストへと回帰する―

この極右思想を連想させるテキストは、実はその大部分を高名な詩人や哲学者たちの言葉の引用、あるいは「使用」(部分的に言葉を変えること)によって織りなされている。近年殊に評価が高い詩人ヘルダーリンや、ドイツ観念論哲学を代表するフィヒテとヘーゲル、そして20世紀哲学最大の巨人ハイデッガー。ドイツ語圏の人間であれば誰もが偉人として認識しているであろう人物たちが、それぞれに祖国を思い、郷土を思って発した、美しく、思慮深く、そして心から誠実であったはずの言葉が、文脈を移され、またその中の一語を変えられて組み合わされただけで、全体として極右思想を思わせる文章になっているのである。希望として生み出されたものがここに悪霊として回帰する。『雲。家。』は当然右傾化に対する批判としても読めるが、さらに深いレベルにおいて問題となっているのは、こうして夢と悪夢が常に背中合わせにならざるをえない人間の言語と思想そのものだろう。

ドイツ演劇界を席捲―ヨッシ・ヴィーラー演出による伝説的な舞台化(1994年)

イェリネクは、この『雲。家。』によって1988年、ドイツの演劇専門誌『テアター・ホイテ』が選ぶ年間最優秀劇作家賞を受賞した。(彼女が同賞を受けたのはその時点ですでに二度目だったが、以後今日に至るまで、通算五度の受賞歴を数える。)従って『雲。家。』は、発表当初より極めて高く評価されていたと言ってよい。しかしより一般的な意味でこの作品が注目され、名声を得たのは、1994年にハンブルクでヨッシ・ヴィーラーが演出した際だった。日本でも二度(1997年／2005年)の演出歴をもつヴィーラーが舞台化した『雲。家。』は、その年のベルリン演劇祭に招待作品として出品され、1994年の年間最優秀演出に選ば

れた。そしてのちにこの舞台はドイツ・フランスの合同出資で成り立つ教養専門チャンネル ARTE によって独仏でテレビ放映され、その際には作家イェリネクとヴィーラーの『雲。家。』舞台化プロセスを紹介する 30 分の特集番組が合わせて制作されている。

イェリネクの『雲。家。』は、テキストとして、また舞台として、極めて深刻で根深い問題を考えるきっかけを与えつつ、しかも専門家と一般の観客とを問わず最高の評価を受けてきた作品と言えよう。

『雲。家。』演出ノート　PortB 主宰　高山明

―翻訳の不可能性への挑戦―

イェリネク作品の歴史的演出で名高いヨッシ・ヴィーラー（スイス）本人から、「日本語でのイェリネク作品上演は不可能だろう」という話を聞いた。言葉とテーマがあまりに深く結びついており、翻訳ではその結びつきが出せないというのが理由であった。これがまだ読んでもいなかった作家イェリネクに興味を持ったきっかけなのだが、無理だと言われたからやってやろうというような偏屈な動機で演出を決意したわけではない。その翻訳不可能性のなかにこそ、逆説的に、日本語でしか実現しえないイェリネク作品の上演可能性が隠されているのではないか。ならば言語（＝ドイツ語）の問題それ自体を扱った作品『雲。家。』に取り組むのが最も「不可能」な、ということは最も「可能性に満ちた」試みになるのではないか。こうした問いが私に『雲。家。』への興味を掻き立てたのである。

―“母語”の癒しと暴力性―

『雲。家。』でテーマ化されている言語の問題を“母語”と捉え、それを“家”に置き換えれば、母語を話さない者を他民族として“家”の外に排除する側面と、他民族にその言語を母語として強要することで同一民族に改造、“家”の内へと同化する側面が見えてくる。“母語”というものが持つこうした暴力的側面を外国語教育の問題に絡め可視化する一方で、そうした側面を癒すのもまた“母語”なのかも知れないというその力もまた具現化したい。しかし“母語”というものが人間にとって本当の“家”になりうるのかという点について、『雲。家。』は痛烈な否を突きつけている。

結局のところ人間は“母語”という“家”に収まりきることはなく、大地に晒し者として残るのが人間の条件である。だが、逆にイェリネクはそこにこそ微かではあれ“言葉”への、“母語”に対する以上の希望を見ているように思われる。ここに翻訳不可能性を逆手に取るチャンスがあるのではないか。

―“言葉”に託された“希望”を見つける作業―

今回私たちが取り組み、最終的に声にするのはドイツ語から翻訳された日本語であり、それもドイツ語を反映させ敢えて変形を被るよう訳された、いわば奇形の日本語である。この意味で、日本語とはいえ安住できるような“家”ではないし、最初から内に亀裂を孕むがゆえの可能性に富んでいる。日本語で上演することによって、『雲。家。』に託された微かな希望を掬い上げ、“言葉”が夢見るような瞬間を現出させることが出来ればと考えている。

エルフリーデ・イェリネク　作家紹介

1946 年オーストリア生まれ。ウィーンで育ち、ウィーン大学で演劇学と美術史を学ぶ。主な作品に、ベストセラーとなった小説「したい気分」「欲望」、戯曲『ブルク劇場』『トーテンアウベルク』『雲。家。』『杖、竿、棒』などがあり、ビュヒナー賞はじめ数々の演劇賞を受賞。1983 年の小説「ピアニスト」は 2001 年に映画化され、その年のカンヌ映画祭で三冠受賞して話題を集めた。
2004 年、「豊かな音楽性を持つ多声的な表現で描いた小説や戯曲によって、社会の陳腐さや抑圧が生む不条理を暴いた」功績により、ノーベル文学賞を受賞。

構成・演出　高山明　演出家紹介

1969 年生まれ。早稲田大学第一文学部哲学科中退後、1994 年に渡欧。観劇放浪生活をしながら、ヨシ・笈田や、トーマス・シュルテミシェル、ヴォルフラーム・メーリング等のもとで演出助手を務め、バーゼル市立劇場、カールスルーエ州立劇場にて演劇・オペラの創作に参加する。並行して、ドイツにて「自由劇団」を結成し戯曲執筆、演出活動も行う。1999 年に帰国した後も、演劇テクストの執筆、実験的な演劇制作に取り組み、2002 年にパフォーマンス・ユニット Port B（ポルト・ビー）を結成。現代演劇の可能性を模索している。2004 年ゲーテ・インスティトゥートの招きにより『ベルリン演劇祭・若手演劇人のための国際フォーラム』に参加。2005 年ベルリンの『InTransit 演劇祭』に招聘されパフォーマンス作品を構成・演出。『ポストドラマ演劇』の著者 H=T・レーマンとの共同プロジェクト（フランクフルト／ベルリン）が始まるなど、ドイツでの活動も積極的に行っている。 2005 年より、にしすがも創造舎レジデント・アーティスト。

Port B ［ポルト・ビー］　カンパニー紹介

2002 年、高山明によって結成。主要メンバーは歌手、映像作家、精神科医、木工職人など演劇以外の職業を持ち、その技術を創作に生かしながら、既成の演劇に囚われない越境的思考をもって、多メディア的、多ジャンル的な活動を展開している。活動の方向性は大きく以下の二つに分けられる。
一つは、主に海外の戯曲を“翻訳・解剖”しながら「演劇（的）テクスト」に取り組む舞台（04 年『ホラテイ人』作：H・ミュラー／シアターχ、05 年『ニーチェ』作：アイナー・シュレーフ／BANKART1929 等）。
もう一つは、都市をフィールドワークしてそこで実際に暮らす人達を舞台に招き、素人のドキュメンタリー性を重視する作品（『Museum: Zero Hour ～J.L.ボルヘスと都市の記憶～』／板橋区高島平、『Re:Re:Re:place ～隅田川と古隅田川の行方（不明）』／墨田区鐘ヶ淵、『一方通行路～サルタヒコへの旅』／豊島区巣鴨地蔵通り商店街 等）。いずれの方向においても、「演劇とは何か」という問いが根底にあり、「きたるべきなにか」としての現代演劇を追求している。

2004 年『ホラテイ人』 シアターχ

2006 年『一方通行路～サルタヒコへの旅』巣鴨地蔵通り商店街

公演評

現代演劇がきたるべきなにかであることをしっている演劇

―『演劇人 020』 佐伯隆幸（学習院大学教授、演劇評論家）

次々と追思考や連想を刺激され、ハイテンションの集中力が要求される舞台ではあるが、
こういう上質の知的な実験的な演劇が日本でも見られるようになったかと、深い充実感に満たされた。

―「DeLi Nr. 5」谷川*道子（東京外国語大学教授）*

商店街旅する演劇-主役は客、店巡って"出演"・・・商店街にとってもうれしい企画

― 「読売新聞」11 月 19 日 日曜版

・・

作：エルフリーデ・イェリネク
翻訳：林立騎
構成・演出：高山明

出演：暁子猫 ほか

映像：宇賀神雅裕 三行英登
音響：内藤正典
舞台監督：清水義幸
照明：江連亜花里
技術監督：井上達夫
宣伝美術：三行英登
ドラマトゥルク： 林立騎
制作：大久保聖子（NPO法人アートネットワーク・ジャパン）

［Port B web］ http://portb.zone.ne.jp

公 演 概 要

公演日　2007 年 3 月 1 日(木)－4 日(日)

3 月1日(木)	3 月 2 日(金)	3 月 3 日(土)	3 月 4 日(日)
19:00★	19:00★	15:00★／19:00★	17:00★

★終演後ポスト・パフォーマンス・トークあり

会場　にしすがも創造舎特設劇場
〒170-0001　東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 旧朝日中学校

料金(全席自由・日時指定・税込)　一般 3,000 円／学生 2,000 円(当日要学生証提示)
豊島区民割引　2,000 円

前売開始　2006 年 12 月 20 日(水)

チケット取扱　チケットぴあ　Tel.0570-02-9999/0570-02-9966(P コード 374-125)／
http://pia.jp/t
ぷれいす　Tel.03-5468-8113
東京国際芸術祭(TIF)　http://tif.anj.or.jp(ネットのみ)

チケットのお問い合わせ　ぷれいす　Tel.03-5468-8113

公演のお問い合わせ　東京国際芸術祭(TIF)　TEL 03-5961-5202
tif@anj.or.jp　http://tif.anj.or.jp